

わが子とともに――

早乙女勝元・直枝

輝坊といっしょに

草土文化



早乙女 勝元（さおとめ かつもと）

一九三二年、東京足立区に生まれた。戦争と貧困のなかで義務教育を終え、町工場に働いたわら文字を志す。一九七〇年東京空襲を記録する会結成の推進力となり、『東京大空襲・戦災誌』（全五巻、講談社）『日本の空襲』（全十巻、三省堂）の編纂に尽力。主な作品は『早乙女勝元小説選集』（全十二巻、理論社）『わが街角』（全五巻、新潮社）『東京大空襲』『東京が燃えた日』（新書、岩波書店）。草土文化の本に、『人間として』『人間らしく』『人間ならば』『シリーズわが子とともに』として『輝坊といっしょに』『共働きはラクじゃない』『親になったが運のつき』『わが子わが夢』と『それぞれの愛』『それぞれの恋』、絵本に『ババママバイバイ』『アウシュビッツからの手紙』など。

わが子とともに 1

輝坊といっしょに

一九八〇年 九月一六日 第一刷発行

著者◎

早乙女勝元
早乙女直枝

発行者

田 辺 徹

印刷所

大 永 舎

製本所

黒 田 製 本

発行所

株式会社 草土文化

東京都千代田区五番町一〇一六
電話（二六四）〇六三一（代表）
振替 東京 五一四六一二三

乙女勝元・直枝

輝坊といっしょに

わが子とともに I

草土文化



生まれて6ヵ月めの輝ちゃんと



1967年2月1日，雪の日に

輝坊といつしよに
もくじ

はじめにひとこと.....10

小さなこぶしにぎりしめて

母親の実感、父親の実感.....14

小さなこぶしにぎりしめて.....20

産休あけの悩み.....27

満員電車で.....33

輝坊は板にねる.....39

おなかをじょうぶに.....46

やっど保育園に

やっど保育園に.....52

最高の愛情とは？.....59

スリルが大好き.....66

北風のなかを.....72

あまいものは毒.....79

はじめての病気.....87

ボクは満一歳

ボクは満一歳.....94

大きくなったら.....101

輝坊、こんにちは！.....108

あるいた、あるいた！.....113

困るのは「坊やあげましようね」.....121

あだなはピリちゃん.....127

泣くのも薬

輝坊のひとりごと.....134

環境が大事.....141

ごはんは七分づき麦入り……………148

さいしょのことば……………154

泣くのも薬……………159

満二歳！……………165

コレ ナァーニ？

てれちゃうナ……………174

あそび場がなくて……………180

ことばが豊富に……………185

夜の散歩道で……………192

コレ ナァーニ？……………198

はじめての海……………203

ぶたれても負けるな

ジュンバンよ！……………210

番外一等……………	218
親にも忍耐力が……………	225
ぶたれても負けるな……………	231
がんばろうの歌……………	238
四月にはおにいちゃんに……………	244
さいごにひとこと……………	250
シリーズ「わが子とともに」によせて……………	254

装幀 杉松 樺

はじめにひとこと

思えば、三年前の冬の日のことでした。

わたしは、大きなおなかをかかえて、彼とともに神田の町を歩いていました。

やがて生まれてくるはじめての赤ちゃんのために、参考になるよい育児書はないものかとわたしたちは、いそがしい時間をさいてさがしてきたのです。

神田でも一、二をあらそうような大きな本屋さんにはいますと、「育児」というたなに、何十冊とかぞえきれないほどたくさんさんの育児書が、きらびやかにならんでいるのにはおどろきました。でも、共働きのわたしたちに、ピンとくるような育児書はありません。

「金ありひまあり庭ありで、母親がつきっきりでやる式の育児書がほとんどだ」

一冊ずつ、かたっぱしからひろい読みしていた彼が、ため息まじりにいいました。

「ほんとね、家で赤ちゃんの世話だけしていられる女性なんて、このごろはめったにいないのに……」

「だれだって理想どおりの育児をやりたいのはやまやまだけど、じっさいはそうできない。だか

ら、育児ノイローゼになるおかあさんも出てくるんだね」

「身にしみてるおかあさんが、書いてくれればいいんだけど」

「これからの育児は、どうやら、自分たちの生活の中で創意を生かし、自分たちの力で作りだしていくしかないんだな」

「そうよ、これまでに残されたたくさんさんのひとの知恵も借りてね」

と、わたしはちょっぴりつけたして、彼の意見に共鳴したものでした。

わたしたちは共働き。わたしは、下町の小学校の音楽教師。彼は売れっ子とは反対のじみすぎる作家。いわずと知れた金なしひまなし庭なしで、これから生まれてくる赤ちゃんを、自分たちの創意と力とで、なんとかいきいきとたくましく育てようと思いつめてみたものの、それはずいぶん漠然としていて不安なものでした。

一九六五年三月三日。とうとう新しい生命が誕生しました。

色のまっくろな、みながびっくりするほど元気な男の子です。わたしたちは、このはじめてのボーヤに、輝（てる）と名づけました。小さなこぶしをにぎりしめて、オギャアオギャアとからだ全体で泣く輝坊の顔を見つめながらわたしは、これから歩いていく道すじに一つ一つたちふさがる壁を、この子といっしょにのりこえるたびに記録をつけよう、そして、その記録をわが子への贈り物にしたいな、と考えたのです。

さいわい、『新婦人しんぶん』が月一回ずつの連載で、輝坊の成長記録を写真つきでのせてくださり、連載が三年つづいて、このたび、手を加えて一冊にまとめることになりました。

「でも、せっかく本になるなら、はたらく人たちの育児の悩みにこたえるものにしたいね」

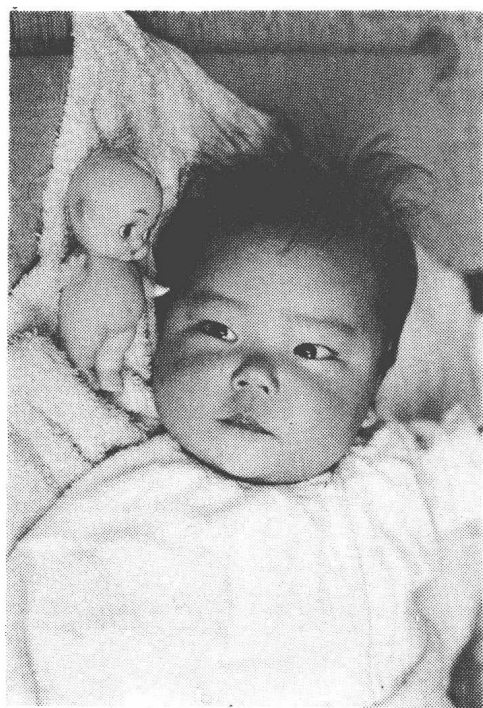
と彼がいうものですから、わたしは家庭とつとめのあいまをぬって、毎晩眠い目をこすりながら三年間の記録を手なおしし、そこに彼がまたペンをくわえて、とくに健康法の出てくるところは鉄砲洲診療所の木下繁太郎先生のアドバイスまでいただき、一般の育児書とはちょっと違ったものになりました（本文中の「ひとこと」は先生に書いていただいたものです）。

わたしたちは、もともと育児の専門家ではありませんので、この記録はもちろん一つの経験にすぎませんけれど、こんにち共働きの若い夫婦が、どのような考えかたで育児にあたったらいいのかを、輝坊といっしょに、一生けんめいさぐつてみたつもりです。

この本が、はたらくみなさんに親しまれるならば、わたしは最高にしあわせです。

早乙女直枝

小さなこぶしにぎりしめて



母親の実感、父親の実感

退院の日、わたしは、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いて、彼といっしょに、葛飾赤十字産院の前から車に乗った。

車は、家の近くに住む加藤印刷のおじさんが、わざわざ、この日のために借りてきてくださったという特別のプリンスだ。

「この子が大きくなったとき、生まれてはじめて乗った車を、ぼくが運転したんだといえば、これはちょっとばかり話のタネになる、もうけもんだよ。はっははは……」

ハンドルをにぎりながら、加藤さんは、歯ぎれのいい声で笑う。

入院のときにももちろん、わたしは車できたわけだけど、そのときは、彼とわたしと二人きりで不安だけを胸に抱いてきた。それが一週間たったら、ちゃんあんと一人ふえている。なんとみちたりた誇らしい気持ちだろう。どこの母親も、みんなこんな気持ちを一度は味わっているのかしら。悪くはないなと、わたしは車のなかでつぶやく。

お産も、早くから無痛分娩の補助動作をこころみたので、意外と楽だった。赤ちゃんは三月三

